

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクト I (教員自由企画型) 2017 年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部福祉学科・助教	柴崎 祐美	印
研究課題名	福祉学科卒業生にみる高齢者福祉施設職員のキャリア形成上の課題：卒後 1～3 年目職員を中心に		
研究期間	2017 年度		
研究経費	100 千円		

【研究の概要】

1. 目的

福祉学科卒業生の一定数は社会福祉士として福祉施設・機関等に就職している。高齢者福祉施設の場合、新人期には社会福祉士でありながらケアワークを期待され本人もその専門性の確立に励むが、2 年目以降、相談職として管理職的な役割が期待されることが多く、そこで不安全感や無力感を感じる者もいる。また、福祉施設の離職率の高さ、高齢社会の進展を背景とした法人の業務拡大等により、新人職員は早いスピードでの成長を期待される面もある。そこで、このような構造の中で従事する卒業生の悩みや対処、将来展望等を調査し、卒業生の初期段階のキャリア形成を支援する方法を検討した。

2. 方法

高齢者福祉施設職員 7 名を対象として半構造化面接を行い、個々の記録を意味内容の類似性にに基づき分類した。

【対象者】卒業時に社会福祉士または社会福祉士受験資格取得済みで、入職後に介護職を経験した者を、研究代表者の授業履修者を中心に機縁法により選定した。入職 1 年目が 3 名、3 年目が 4 名で、介護職初任者研修修了者が 6 名であった。勤務先は特別養護老人ホーム 4 名、有料老人ホーム 3 名であった。

【調査項目】基本属性、職務内容に対する期待とギャップ、職務上の悩みとサポート、重度要介護者への対応、相談職への転換、福祉学科の教育に対する評価など。

【倫理的配慮】研究の趣旨、調査への協力は自由意思であり、拒否により不利益を被ることはないこと等について口頭と書面で説明し、書面で同意を得た。

3. 結果及び考察

結果の中から、介護職としての悩みと相談職への転換について以下にまとめる。

福祉学科で学び、卒業前に介護職初任者研修も修了したが、入所者を前に【基礎では通用しない】ことを痛感し、入所者に【申し訳ない】と感じながら介護にあたっていた。しかし入所者の重度化や慢性的な人員不足の中で、(福祉以外の) 学部卒者と比べ【経験があるとみなされ】、フロアの中で最重度者の担当を任される等、高い役割期待と自分の実力との差に【戸惑い、葛藤】を覚えていた。一方で、1 年目は【ど素人】と見てもらえ、重度者へのケアも個人ではなく【フロア全体の課題】と捉え、相談にのってもらえることで安心を感じていた。介護の専門教育を受けていない新人職員に対しては、目の前の利用者に通用する具体的なケア方法の習得の機会を設け、介護業務に対する不安、負担を解消することが求められる。

将来的には相談職への転換を希望しており、入職後約 1 年半で 3 名が生活相談員に転換していた。前任者の退職や新規施設開設により生活相談員のポストが空いたことによるもので、希望が叶う喜びと相談職が出来るか不安を抱えての【急な異動】であった。介護職を続けている対象者から「いつ生活相談員になれるか見えない」「生活相談員を希望しても、人事部は生返事するだけ」という語りもあり、キャリアパスの中に生活相談員への転換が位置付けられていないことが不安の根底にあると考えられた。

4. まとめにかえて

調査対象者から「調査協力と言いながら、本当は悩み相談のつもりで来た」「話しているうち、自分が(高齢者施設で)何をやりたいと考えていたか思い出せた」という語りがあった。インタビューの中で福祉学科の教育に対する評価や期待を引き出すことは出来なかったが、これらの語りから、職場の上司以外からスーパーバイズを受ける機会を提供することは、福祉学科として卒業生に対して出来ることの一つであると考えた。

